

# 中原中也「サーカス」

——茶色い戦争——

## 1

中原中也の初期の代表作として「朝の歌」と並んで最もよく知られているのが「サーカス」である。初出は「生活者」昭和四年十月号で、そのときは「無題」であった。同時期に書いたと思われる詩が九月号にも掲載されており、その際の付記には「これらは四年程前同君の十九頃の詩です」とある。それを信じれば大正十四年に書かれた作品だ。ただ、十月号には「朝の歌」も掲載されており、これは大正十五年の作である。よって、現行の全集の解題では「大正一四年から一五年までの間の制作と考えるのが無難であろう」とされている。収録された『山羊の歌』の配列から、かつては「朝の歌」よりも早い制作と考えられたこ

## 東 典 幸

ともあり、反面、それにしては作風や完成度が「朝の歌」以前の諸作とは異なるので、もっと後の詩ではないか、と疑われたこともあった。とにかく、中原にとって会心の作であったことは確かで、大岡昇平は「中原に始めて会った人間は、大抵朗誦を聞かされたものである」と語っている。あの「ゆあーん ゆよーん」を「中原は仰向いて眼をつぶり、口を突出して、独特に唱った」という<sup>②</sup>。

幾時代かがありまして

茶色い戦争ありました

幾時代かがありまして

冬は疾風吹きました

幾時代かがありました

今夜此処での一と殷盛<sup>さか</sup>り

今夜此処での一と殷盛<sup>さか</sup>り

サーカス小屋は高い梁

そこに一つのブランコだ

見えるともないブランコだ

頭倒<sup>さか</sup>さに手を垂れて

汚れ木綿の屋蓋<sup>やね</sup>のもと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

その近くの白い灯が

安値<sup>やす</sup>いリボンと息を吐き

観客様はみな鰯

咽喉<sup>のど</sup>が鳴ります牡蠣殻と

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外<sup>やぐわい</sup>は真ッ闇 闇の闇

夜は劫々と更けまする

落下傘奴<sup>らくかがさめ</sup>のノスタルジアと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

これまで多くの論文や評論、鑑賞文が書かれてきた。詩人の伝記的事実との照らし合わせはどんな作品でも行われるとして、それ以外には、三つの観点から論じられてきた。まず、全体を貫く歌としての調子よさ、そして、冒頭の「茶色い戦争」、それから、独特の擬音、である。最近では分析も細かくなってゆく傾向があり、陶原葵は同時代のサーカス小屋の版画との類似に触れ、加藤邦彦は発表されるごとに変わっていった活字の字下げに着目して音楽性を論じている。ほか、昨年<sup>①</sup>のことで詳細をまだ知ることができずにいるが、「ゆあーん ゆよーん」について、鈴木貞美が朝鮮語や中国語との関連を指摘しているという<sup>⑤</sup>。全体の印象として、「茶色い戦争」への言及は減っているように思う。論じつくされたのだらうか。本論文ではいまひとたびこの語について考えてみたい。よく知られた作品鑑賞や研究で、この語がどのように解釈されてきたかをふりかえりながら進めることにする。

## 2

まず「茶色い」から。

伊藤信吉は、「サーカス」「茶色い戦争」「幾時代かがありまして」などの言葉——そのイメージには、どこことなく古くさいところがある」という印象から始めている<sup>(6)</sup>。明治三十九年生まれの体験として、「サーカスぜんたいが前近代の興業という感じがする」らしい。

明治年代以前の戦争は、現代兵器の残虐きわまりない戦争にくらべれば、「茶色い戦争」という形容があてはまるようだ。明治の軍人が肋骨のような飾りのある軍服（俗に肋骨服といった）を着た姿をみたことのある人は、「茶色い戦争」という形容が実感をもつて分るだろう。要するに中世は明治年代やそれ以前の風俗——文明を、「茶色い戦争」といったのである。そうした時代を包括的にあらわすために、「幾時代かがありまして」といったのである。その古ぼけた昔の感じを黄色いシミのように付けて、「今夜此処で」サーカス団は興行している。

軍服に私は詳しくないが、肋骨服は茶色ではなからう。しいて言えば、あの特徴的なひも飾りが色あせて、茶色に近づいたのを見たことはある。なにより、伊藤の言う茶色は「黄色」っぽいようだ。不思議なことに、これは伊藤だけの感覚ではなさそうで、阪本越郎の鑑賞文の茶色も黄色味を帯びて「カーキ色」である。これが日本陸軍の軍服からの連想であることは明らかだ<sup>(7)</sup>。

「茶色い戦争」というのは、明治時代の日清・日露の戦役あたりをいい、そこには日本の軍隊のカーキ色の連想もある。戦争や酷寒の冬など、厳しい時間の経過を幾時代も重ねたという歴史的叙述を、中世は「幾時代かがありまして」と簡易にいつてのけた。

カーキ色説を「あまりに自明で面白くない」と加藤周一は切って捨てる。自明だと思う者さえ存在することに私は驚くが、それはいいとしよう。加藤は「おそらくここでの「茶色」は、何年か経って変色した写真の「茶色」だろう、と私は考える」と言う。大正八年生まれの体験として、彼は「軍人や砲車や戦場の古い写真、変色して茶色になった

写真や絵葉書」を見たことを思い出す。<sup>(8)</sup>

その黄ばんだ、あるいは茶色がかった色は、写真の古さを示していて、ああ遠い昔、私が生まれて来るまえに、どこか遠いところで私とは何の係わりもない「戦争」というものがあつたのか、と子供の私は考えていた。その想い出は、まさに「幾時代かがありました」茶色い戦争ありました」の中原の二行に要約されている、と思う。中原の「幾時代」は古い写真によって代表されていた。要点は「戦争」ではなくて、「茶色」の方である。

加藤もつい「黄ばんだ」と書きこんでおり、結局は黄色くなってしまう話だが、黄ばんだ写真色説は彼だけの感覚ではない。中村稔もこの詩の冒頭を、「多くの時代があり、戦争があり、戦争の記憶もふるびた写真をみるように変色しています」と解説している<sup>(9)</sup>。大正末年には十分に古びて黄ばんでいた「遠い昔」の戦争の写真とは日露戦争よりは日清戦争だろうか。「戦争の記憶」とある以上、同時代の近い過去を中村は想定しているようで、しかし、そのあた

りは「写真をみるように」とばかりして、写真の古色のつじつまを合わせている。なお、黄ばんだ写真色説の最初の提唱者は丸山薫ではないか。<sup>(10)</sup>

「茶色い戦争」という言葉は、なにかピンとこないようだが、それでいながらおもしろいのである。「戦争」に「茶色い」という色付けはどういうことなのか？ という疑問も起きる。だがそんな意味的な疑問がありながら感覚的にはおもしろいと思い、うなずけもするのは、「茶色い」と「戦争」という二つの言葉が実は意味的にもつながっているからである。古びて茶色に変わった写真ということであって、そういう、いまは蒼古とした写真にだけ残っている戦争が明治からの歴史として積み重なっているというようなことをさすのであろう。一見突拍子もないようにいてしかもおもしろい言い方だ。

もっとシンプルに考えてもいいと私は思う。ふつうに茶色と言えば土の色である。『山羊の歌』『在りし日の歌』には土の色が五回歌われている。

庭の地面が、朱色に睡つてゐた。〔少年時〕『山羊の歌』

湿つた野原の黒い土、短い草の上を〔妹よ〕『山羊の歌』

鳶色の土かをるれば〔早春の風〕『在りし日の歌』

土は枇杷いろ 蠅が泣く〔三歳の記憶〕『在りし日の歌』

土は薔薇色、空には雲雀〔閑寂〕『在りし日の歌』

鳶色も枇杷色も茶色である。<sup>(11)</sup>「サーカス」の茶色も土のイメージとして受け取るのが無理の無い見方ではないか。すると、「茶色い戦争」は陸戦のイメージである。なお、未刊詩編には「六月の野の土赫く」〔屠殺所〕というのもあり、「朱色」「薔薇色」と合わせ、中也の歌う土の茶色は黄系よりは赤系ではなからうか。もちろん、陸戦それ自体を意味したくて戦争を茶色くしたとは考えにくい。〔鯛〕

や「牡蠣」は海の生物だから陸戦とは縁の無い存在だった、とまでも読まずにおく。中也に限らず一般的に「戦争」と言われて浮かぶのは海戦よりも陸戦だろう。戦争の雰囲気は簡潔に言い表すのに茶色の色感が選ばれたのだ。赤系の茶色とすれば、落ち着いた色である。戦争にはふさわしくない。牧歌的でさえある。それは歌い手から戦争の実感が失われていることを示している。詩全体の現実感の無いおとぎ話めいた雰囲気の表現に合っている。

### 3

次は「戦争」である。

すでに引用したように、伊藤信吉は「明治年代以前の戦争」と述べ、阪本越郎は「明治時代の日清・日露の戦役あたり」を考えた。似た説を唱える者に村野四郎があり、「茶色い戦争」に彼は次の注をつけた、「日清、日露戦争のような旧式な戦争を指すものか。この茶色のイメージは、『未開』とか『シナ人』とか『火薬』とか、そうした意識に関連して生まれてきたものと思われる」。<sup>(12)</sup>変わったところでは河上徹太郎だ。「恐らく応仁の乱だの、三十年戦争だののことであろう」と述べている。<sup>(13)</sup>座談会での発言を引

用しておこう。<sup>14</sup>

つまり古い戦争ということ。古いということは、兵士と兵士が戦争をしている戦争です。日露戦争は、すでに国民皆兵で、兵士の戦いではない。ぼくは、あるプロとプロが戦争している時代が昔あったな、というふうに思う。それはレンブラントの絵が茶色であるように。

これら「茶色い戦争」に現実の戦争を当てはめる説には無理があろう。仮にこれで詩の最初三連を説明できたとしても、それをその後のサーカス小屋の非現実性につなげることは不可能だと思う。詳説はしない。その必要が無いほど、一九七〇年代以降この種の解釈はほとんど絶えてしまった。

北川透は、『茶色い戦争』が何時代かの戦争をあらわしているというような鑑賞法があるのであるが、これらの詩句にいちいち現実的な意味の属性を求める理解の仕方ほど、ナンセンスなものはないだろう」と述べている。<sup>15</sup>代わりに彼は心象説を説く。

茶色い戦争も、冬の疾風も、中原の《倦んじてし》心象のなかの憶いであり、ゆれうごきである。このサーカス小屋にしても、現実に中原がサーカス小屋に居てこの詩がつくられたというようなサーカス小屋ではなく、心象のなかに、茶色い戦争が起り、疾風が吹き抜けていったように、過去のいつか、故郷の田舎町が京都で観たサーカスの風景が契機となつて超現実的なイメージとして憶いおこされたのである。

なお、中也個人の体験とサーカス小屋の心象を結びつける論者は多い。中村稔も、「これが作者の幼年時代への郷愁の作であることは間違いない」と断言している。<sup>16</sup>北川もそうだろう。右の引用では「過去のいつか」云々がそれにあたる。

心象説は現在の主流だ。研究者にとって大岡昇平以上に影響力のある業績を残したと言える吉田熙生も、「この詩はサーカスの一場面を描写しながらも、実は詩人の意識の動きを表現した詩」と述べており、心象説に立っているとみなしていいだろう。<sup>17</sup>私も心象説が正しいと思う。ただ、中也個人の心象か心象としてこの詩が書かれたかどうかは

別の問題である。それは後述する。

この説の場合、現実の戦争を当てはめる説とは正反対に、中也の詩の現実性の弱さが浮かび上がる。中也の魅力を認めつつも、北川透や中村稔はここから中也批判を展開する。「中原にとつて、歴史や時代が『茶色い』とか『疾風』とかいう、いわばヴェールを通してみられた表情のようなものでとまつてしまつてるとき、そこにうたの相貌は現れても、世界に対峙する反現実の世界は現われようがない」と北川は言ひ、<sup>18</sup>「郷愁は郷愁にとどまり、批評がない」と中村は言ふ。<sup>19</sup>要するに中也がしばしば歌の快楽におぼれてしまう問題を両者は指摘している。その批判を踏まえたうえで近代批判としての歌う中也を見出したのが佐々木幹朗だ、<sup>20</sup>と云えば、中也評価の大きな流れを説明できたことになるのではないか。ただ、「戦争」について、もうひとつ指摘しておきたいことがある。

ここまで、多くの説を紹介してきた。共通点は明らかだ。「茶色い戦争」に関する主要文献をすべて私は調べたのか、確信は持てないが、いまここで引用できなかつたものも含め、私は例外を見つけることができなかった。<sup>21</sup>「茶色い戦争」に言及する者は、この戦争を中原にとつても読

者にとつても過去の戦争とみなしており、それ以外の可能性については否定はもちろん検討さえしていないのである。「茶色い戦争」が過去の戦争であることは、それほど自明であろうか。むしろ、私には未来の戦争のように思える。

詩は「幾時代かがありまして」と始まる。吉田熈生もこの戦争を過去の戦争として考えているが、「遠い過去を起点とする時間の流れを指している」と述べたのは正しいと思う。<sup>22</sup>「時間の流れ」は過去へ逆行する流れではないことを確認しておく。また、「幾時代」と言われれば、普通は複数の世代にまたがる時間を思うものではないか。この一行は繰り返され、そのように膨大な時間が未来へ向けて流れてゆくことによつて「茶色い戦争」は遠い過去に送られてゆく。つまり、個人レベルの小さな時間を、回想のつかさねによつてさかのぼつてゆくようには読めない。

そして「今夜」がおとづれる。「今夜」とはいつなのか。これまでの研究者のように、この詩が大正十四年から十五年までの間に制作されたとして、だからそのあたりだろう、と考えていいのだろうか。けれど、心象説に立てば、この詩の歌い手は何百年も先の未来に意識を置いていると

考えることも不可能ではないはずだ。その場合の遠い過去の起点とは、読者や作者における現在で、そこから幾時代もが過ぎてゆくと考えて、矛盾が起こるだろうか。むしろ、「むかしむかし」ではなくいきなり「幾時代かがありました」と切り出されたお話を聞く者が、これから昔話が始まることを期待する方が困難だろう。

中原中也には幼年時を回想する詩が多い。それを知っていて同じ内容を「サーカス」にも期待する読者が、「茶色い戦争」を昔の出来事として読むのではないか。

大岡昇平は「この詩が作られた昭和初期にはシベリヤ出兵の失敗などから、むしろ戦争をばかにした考えが一般だった」と述べる。<sup>(23)</sup>「昭和初期」は「大正末年」に言い換えても意味は通ずる。中原中也個人や当時の日本人の戦争観を考えることの重要性を示唆する一言だが、あまり深く研究されてこなかった。いまは、平岡敏夫が「中也は軍事なるものを思慕しつつ、軍事なるものと戦っていたのである」と述べただけ挙げておく。<sup>(24)</sup>平岡は、中原の詩の軍事的イメージが「ある欠落感、空虚感」を帯びていることを指摘した。それが平岡の述べるような弟の死と関連したもののかはわからないが、欠落感・空虚感は「サーカス」に

もあると思う。「茶色い戦争」を未来の戦争と考えた場合、それはどんな欠落であり空虚だろう。

一言でいえば、戦争による人類の消滅であり、かつて繁栄した文明が消滅した虚しさではないか。「サーカス小屋」は廃虚にひとしく、「観客様はみな鰯」は人間の居ない世界を表し、ブランコ乗りの生気の無い「頭倒さに手を垂れて」という様は死体のイメージである、と読める。「ノスタルジア」も中也個人の思い出よりは、人類の文明への郷愁だ。もちろん、滅びたからこそ湧く郷愁である。

「近い将来に最終戦争の来ることは私の確信である」と石原莞爾が述べるのはもっと後のことで、しかも、石原にとつて最終戦争は平和と繁栄をもたらす戦争だった。<sup>(25)</sup>だから、「サーカス」をこのように読むのは、核時代を知る現代人の最終戦争観を投影しただけなのかもしれない。とは言え、従来の解釈にも不満があるのはすでに述べたとおりだ。本論文は「茶色い戦争」という一言について考えたにすぎず、後半部をどう解釈するかということを含め、今後の課題としたい。

歌や朗誦が好きだった中原中也の姿を大岡昇平は、「上半身を反らせて歌う。歌いおわって、がつくりうつむい



て、だみ声で「ばんやむ」という」と回想している。「ばんやむ」の意味を「万やむをえない」「どうしようもない」と大岡は説明している。<sup>(28)</sup>しかし、歌い終わりの一言なのだから、「ばんやむ」は「すべて終わった」の意味であり、「おしまい」と中也是言ったのだ、と考える方が自然ではないか。そして、その方が、最終戦争後の世界を描いたと考えた場合の「サーカス」にますますふさわしいと思う。

## 注

- (1) 『新編中原中也全集第一巻解題編』（角川書店、二〇〇〇年）。
- (2) 『朝の歌』（角川書店、一九五八年）。
- (3) 『中原中也のながれに』（思潮社、二〇一三年）。
- (4) 『中原中也と詩の近代』（角川学芸出版、二〇一〇年）。
- (5) 佐々木幹郎のツイッターで知った。「9月14日の山口での「中原中也の会」大会。鈴木貞美氏の講演で中也の詩「サーカス」にあるオノマトペ「ゆあーん ゆよーん」が朝鮮語方言の可能性あり、との指摘。その後の鈴木氏の調査で、中国語の漢音「ヨア ユア」にあり、との報告が、今日届いた。フィールドワークによる素晴らしい新解釈ー」（二〇一三年九月一七日）。
- (6) 『現代詩の鑑賞（下）』（新潮社、一九五四年）。

- (7) 『日本の詩歌23 中原中也 伊藤静雄 八木重吉』（中央公論社、一九六八年）。
- (8) 『近代の詩人十 中原中也』（潮出版社、一九九一年）。
- (9) 『名詩観賞 中原中也』（講談社、一九七九年）。
- (10) 『三好達治と中原中也』（『日本の近代詩』読売新聞社、一九六七年）。
- (11) 茶色やそれに近い色が使われた例では、「紅殻色の格子」（月）、「鶯色の古刀の鞘」（「雨の日」）、「肌赤銅の乾物」（「朝鮮女」）がある。いずれも『在りし日の歌』。
- (12) 『鑑賞現代詩Ⅲ昭和』（筑摩書房、一九六六年）。
- (13) 『日本のアウトサイダー』（中央公論社、一九五九年）。
- (14) 『座談・中原中也』（「四季」一九六八年四月）。
- (15) 『中原中也の世界』（紀伊国屋書店、一九六八年）。
- (16) 『中原中也私論』（思潮社、二〇〇九年）。
- (17) 『鑑賞日本現代文学第20巻 中原中也』（角川書店、一九八一年）。
- (18) 注(15) 参照。
- (19) 注(16) 参照。
- (20) 『近代日本詩人選16 中原中也』（筑摩書房、一九八八年）。
- (21) 最近の重要な「サーカス」研究で、本論文で扱えなかったのが長沼光彦『中原中也の時代』（笠間書院、二〇一一年）であるが、これも例外ではない。
- (22) 注(17) 参照。

(23) 「中原中也没後五十年後の「絶唱」」〔昭和末〕岩波書店、一九八九年。

(24) 「軍事なるもの」〔国文学〕一九七七年十月。

(25) 『世界最終戦論』(新正堂、一九四二年)。

(26) 注(23) 参照。

(本学日本語日本文学科准教授)